



道コン1・2年生 8/10

道コン3年生 8/11

数学検定 8/25



今年の夏熟に来てくれた卒業生 左から2期生 岩淵君 8期生 石山君 10期生 森本君 14期生 深瀬君



17期生 小林君(専門学校2年) 18期生 廣谷さん(藤女子大1年) 18期生 佐藤さん(市立看護1年) 20期生 佐藤さん(北陽2年)



13期生 佐藤さん・堀江さん



17期生 富樫君(高専5年)



19期生 高橋君・坂上君(高専3年)



『夏期講座で学習した成果を!』

夏休みが終わってからの暑い日が続いています。9月は各学校で定期テストがあります。

この夏、例年にならぬほど卒業生がたくさん来てくれました。社会人になった人も、いま目標に向かって勉強している人も現実の厳しさを話してくれました。実際、大学を卒業して就職して「今いじめを受けてます」と話してくれた深瀬君や職場での理不尽な対応に辞表を出したが「君がいけないと困る」と慰留されたという森本君。さらには自分の職場でも本場に「新型うつ病」で辞めた人がいるという話も聞きました。しかし、それでも頑張れるのは中学生のときの塾での経験や頑張った結果や達成感が今の自分に繋がっていると話していました。

結局、自分の将来のために今やらなければならぬことに真剣に取り組む結果を出すこと以外にないのです。定期テストに向かってとにかくやることです。

朝日新聞の1面コラム「天声人語」の書き写しに、奈良県立高田高校教育コースの3年生(1クラス、38人)が取り組んでいる。自分の考えを相手に分かりやすく伝える表現力を身につけるのが狙いだ。

午前8時半。朝のホームルームが始まると、生徒たちが一斉に自主学習を始める。1時間目が始まる8時45分までの間、英単語でも、小テストがある科目でもかまわない。取材で訪れた日は大半の生徒が「天声人語書き写しノート・学習用」を取り出し、書き写しを始めた。教育コースは、小学校教員になるため教員養成系大学などへの進学希望者が集まっている。

担任の吉田祥子教諭「国語Ⅱが最近の生徒は教科書や参考書にマーカーを引くだけで、書いて覚える習慣が定着してないと懸念していた時、天声人語ノートを知った。書き写しながら文章のまとめ方や表現力を学んでもらおうと、4月から自主学習の教

材のひとつにしたという。毎週月曜に3日分の天声人語を配る。生徒は各自、ノートに貼って自分のペースで書き写す。生徒が関心を持ちそうな教育、高校生についての話題、スポーツ、季節の話など内容を選べるよう、1年前のものを使っている。昨年3月の東日本大震災にまつわる内容も多いという。

吉田教諭にお願いし、クラスの生徒に書いてもらった感想(一部)は表の通り。「めんどくさい」と「小論文で使える」など肯定的な意見が多かった。小金沢健太さん(18)は「草いきれ」とか知らない言葉も覚えてきたし、原子力発電など社会の出来事に関心がわいてきた。小論文の書き方のヒントにもなりそう。熨斗(のし) 阿里咲さん(17)は「小説は好きなのですが、評論文は苦手でした。書き写しているうちに苦手意識が薄れました」と話す。

(赤木基宏) ASAHIコム 8月11日より塾でもやろうかな!

漢字検定合格者

- 準二級 山角拓矢(遠矢中三)
- 三級 久保咲月(富原中二) 本間直弥(富原中三) 國分拓実(青陵中二)
- 四級 大坪由依・大坪舞依(富原中二) 春日駿佑(美原中三) 斗内凌平(鶴居中三) 工藤伶奈(美原中三)
- 五級 山崎柘太(富原中二) 石田太郎(美原中三) 栗山留佳(富原中三) 姉崎礼称(鳥取中三)
- 六級 衣川千晴(富原中二) 櫛屋敷樹稀也(虚栄中二)
- 七級 山上彩夏(鶴野小五)
- 八級 田中花音(鳥取西小四)

7月13日に行われた漢字検定の合格者です。第二回は11月実施予定です。

9月の予定

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土
休塾			■美原定期テスト				休塾	秋分の日 休塾	■鶴居定期テスト		■遠矢定期テスト	■富原定期テスト	敬老の日 休塾	休塾				★学力Aテスト	■湖陵高校定期テスト		★一〇〇〇分特講	■北陽・東高校定期テスト		休塾	■北陽定期テスト	■青陵定期テスト	休塾	休塾	休塾

■ 明治大学「志願したい」首位 ■

関東地区、就職支援に関心、民間調査 つむぎNEWS 7/25より

リクルートが24日発表した高校生の「志願したい大学」ランキングで、明治大が4年連続で関東地区の1位になった。景気低迷を背景に「就職に有利」「通学に便利」といった実利的な特徴に関心が集まっている。

ランキングは関東、関西、東海の3地区の高校3年生を対象に4月に実施し、1万424人の回答を集計した。

関東での明治大の「志願度」は12.8%で、2位の早稲田大(12.2%)を0.6ポイント上回った。支持を集めた理由の一つが学部やキャンパスの新設。明治大は2013年4月、数学の応用や情報技術を学ぶ「総合数理学部」を新設し、同時に東京・中野に新キャンパスも開く。就職支援が手厚いイメージも高校生や保護者をひき付けている。

新キャンパスや就職支援が人気なのは他地区も同様。関西地区では同志社大が昨年8位から5位に上昇。同大は13年4月に文系4学部の1、2年生向けキャンパスを現在の京都府京田辺市から京都市に移す。

教育学部や医学部看護学科を持つ三重大が東海地区で昨年10位から4位になるなど、資格取得に強いとされる学部がある大学は地域を問わず上位に目立った。

ランキングをまとめたリクルート進学総研の小林浩所長は「景気不安の中、卒業後にどうなれるのかを大学に求める傾向が強まっている」と指摘する。

【表】高校3年生が志願したい大学

関東地区		東海地区		関西地区	
1(1)	明治大	1(1)	名古屋大	1(1)	関西大
2(2)	早稲田大	2(2)	名城大	2(2)	近畿大
3(3)	日本大	3(3)	南山大	3(3)	神戸大
4(5)	立教大	4(10)	三重大	4(4)	関西学院大
5(4)	青山学院大	5(6)	岐阜大	5(5)	大阪市立大
		5(7)	名古屋市立大	5(8)	同志社大

(注) リクルート調べ、カッコ内は昨年順位

「字のないはがき」眠る盃より 向田邦子

死んだ父は筆まめな人であった。

私が女学校一年で初めて親元を離れたときも、三日にあげず手紙をよこした。当時保険会社の支店長をしていたが、一点一画もおろそかにしない大ぶりの筆で、「向田邦子殿」と書かれた表書きを初めて見たときは、ひどくびっくりした。

父が娘あての手紙に「殿」を使うのは当然なのだが、つい四、五日前まで、「おい、邦子！」と呼び捨てにされ、「ばかやろう！」の罵声やげんこつは日常のことであったから、突然の変わりように、こそばゆいような晴れがましいような気分になったのであろう。

文面も、折り目正しい時候のあいさつに始まり、新しい東京の社宅の間取りから、庭の植木の種類まで書いてあった。文中、私を貴女とよび、「貴女の学力では難しい漢字もあるが、勉強になるからまめに字引を引くように。」という訓戒も添えられていた。

ふんどし一つで家じゅうを歩き回り、大酒を飲み、かんしゃくを起こして母や子供たちに手を上げる父の姿はどこにもなく、威厳と愛情にあふれた非の打ちどころのない父親がそこにあった。

暴君ではあったが、反面照れ性でもあった父は、他人行儀という形でしか十三歳の娘に手紙が書けなかったのであろう。もしかしたら、日ごろ気恥ずかしくて演じられない父親を、手紙の中でやってみたのかもしれない。

手紙は一日に二通来ることもあり、一学期の別居期間にかなりの数になった。私は輪ゴムで束ね、しばらく保存していたのだが、いつとはなしにどこかへ行ってしまった。

父は六十四歳でなくなったから、この手紙のあと、かれこれ三十年付き合ったことになるが、優しい父の姿を見せたのは、この手紙の中だけである。

この手紙もなつかしいが、最も心に残るものをといわれれば、父があて名を書き、妹が「文面」を書いた、あのはがきということになろう。

終戦の年の四月、小学校一年の末の妹が甲府に学童疎開をすることになった。すでに前の年の秋、同じ小学校に通っていた上の妹は疎開をしていたが、下の妹はあまりに幼

く不憫だというので、両親が手放さなかったのである。ところが、三月十日の東京大空襲で、家こそ焼け残ったものの命からがらのめに遭い、このまま一家全滅するよりは、と心を決めたらしい。

妹の出発が決まると、暗幕を垂らした暗い電灯の下で、母は当時貴重品になっていたキャラコで肌着を縫って名札を付け、父はおびたじしいはがきにきちようめんな筆で自分あてのあて名を書いた。

「元気な日はマルを書いて、毎日一枚ずつポストに入れなさい。」と言ってきかせた。妹は、まだ字が書けなかった。

あて名だけ書かれたかさ高なはがきの束をリュックサックに入れ、雑炊用のどんぶりを抱えて、妹は遠足にでも行くようにはしゃいで出かけていった。

一週間ほどで、初めてのはがきが着いた。紙いっぱいほみ出すほどの、威勢のいい赤鉛筆の大マルである。付き添って行った人の話では、地元婦人会が赤飯やぼた餅を振る舞って歓迎してくださったとかで、かぼちゃの茎まで食べていた東京に比べれば大マルにちがいがなかった。

ところが、次の日からマルは急激に小さくなっていった。情けない黒鉛筆の小マルは、ついにバツに変わった。そのころ、少し離れた所に疎開していた上の妹が、下の妹に会いに行った。

下の妹は、校舎の壁に寄り掛かって梅干しのたねをしゃぶっていたが、姉の姿を見ると、たねをぺっと吐き出して泣いたそう。

まもなくバツのはがきも来なくなった。三月目に母が迎えに行ったとき、百日ぜきをわずらっていた妹は、しらみだらけの頭で三畳の布団部屋に寝かされていたという。

妹が帰ってくる日、私と弟は家庭菜園のかぼちゃを全部収穫した。小さいのに手をつけるとしかる父も、この日は何も言わなかった。私と弟は、ひと抱えもある大物からてのひらに載るうらなりまで、二十数個のかぼちゃを一行に客間に並べた。これくらいしか妹を喜ばせる方法がなかったのだ。

夜遅く、出窓で見張っていた弟が、「帰ってきたよ！」と叫んだ。茶の間に座っていた父は、はだして表へ飛び出した。防火用水桶の前で、やせた妹の肩を抱き、声を上げて泣いた。私は父が、大人の男が声を立てて泣くのを初めて見た。

あれから三十一年。父はなくなり、妹も当時の父に近い年になった。だが、あの字のないはがきは、だれがどこにしまったのかそれともなくなったのか、私は一度も見していない。

この文章は、中2の国語教科書(光村図書)に載った、向田邦子さんの短編小説集「眠る杯」の中の短いエッセイです。

今から65年以上も前の親子、家族の話です。これを読んだとき涙が出ました。しかし、今時の中学生は、この父親の愛情を理解できるだろうか。自分のために、1年分もの、あるいはそれ以上の大量のはがきに、丁寧に宛名を書いてもらった経験もないし、それに勝るような父親の愛情を注がれたことがないからではないだろうか。経済的に豊かになったことで、愛情や絆よりも物質的な豊かさを求めるようになり、それが幸福の基準になってしまったからではないだろうか。

いまどき、理不尽な父親などないかもしれませんが、昔のように威厳のある父親像というのも見当たらなくなりました。

子供たちは、社会の唱える平等や人権、プライバシー、などで守られ、知らず知らずのうちに過保護な状態の中で育っています。力強く生きるエネルギーはないのです。いまどきの子供たちは、いまどきの大人の影響を受けて成長します。

いじめや引きこもり、新型「うつ病」、など、学校でも社会に出てからでも問題だらけです。それらの原因の大部分は過保護による、コミュニケーション能力や責任感、忍耐力の欠如によるものです。何でも与えられことで、我慢をすること、耐えることが出来ない、もちろんハングリー精神など培われるはずなどありません。

いじめで子供が自殺に追い込まれているのに気づかない学校や大人、気づいているのに知らないふりをしている無責任で無能力な教育現場の実態が毎日のように報道されています。しかも「いじめは悪い」「いじめはやめましょう」ばかりです。

いじめのない社会などありません。社会人になってもいじめはあります。本来「生きる力」とはそんな時にこそ必要な力で、社会に出てからはなおさらのことです。

いじめや困難な状況におかれた時のために、立ち向かう力やコミュニケーション能力が必要です。そのために大人は、親は何ができるのか本気で考え、行動する必要があります。建前論では何も解決できないのです。

話がそれましたが、向田邦子さんのこのエッセイのお父さんのような「父親」のようになること。理不尽さと愛情は両立するのです。これほどの愛情を子供に注ぐことができるなら、普段いくら厳しく理不尽でも、子供たちは安心し感謝し、自信を持って成長していけるのではないだろうか。頑張りましょうお父さん！